

主体的に学ぶ

Lesson 9 文法のまとめ

過去形(一般動詞)

過去形は、過去の動作や状態について言うときに、動詞を「過去形」にして表します。

Amy **played** basketball last Sunday.
Amy **went** to Hiroshima last year.

Did Amy **play** basketball last Sunday?
— Yes, she **did**. / No, she **did not**.

Amy **did not play** basketball last Sunday.

動詞の過去形

動詞には、その過去形が ed で終わる(閉鎖動詞)と、went(goの過去形)のように形が変わる(不規則動詞)があります。

過去形の作り方

① ed をつける play → played | cook → cooked | want → wanted |
② 音がかわる use → used |
③ 動詞が不完全なとき、y をつけて ed をつける study → studied |
④ 動詞が不完全なとき ed をつける sleep → slept |

不規則動詞の過去形

go → went | say → said | have → had | see → saw

現在形から過去形

① I play baseball. ② I played baseball yesterday.

③ search 見直しとつづき

次の単語の過去形を書いて書きましょう。そして、つづきの単語のルールを照らし合わせよう。

1. look 2. fix 3. use 4. enjoy 5. play
6. stop 7. study 8. work 9. wash 10. visit

文法のまとめ

その課で学んだ文法をふり返ります。授業でも家庭学習でも活用できるよう、ポイントを簡潔にまとめています。

Review 時制

これまで出てきた、現在・過去・未来を表す動詞を整理しましょう。

① 現在形「～します」

② 現在進行形「～しています」

③ 過去形「～しました」

④ 過去進行形「～していました」

⑤ 現在完了形

⑥ 未来を表す表現

⑦ will 「～でしょう」「～しようと思ふ」

Review

レッスン、学年を超えて、関連する文法事項を横断的に整理します。ビジュアルな提示で、英語のしくみの理解を助けます。

絵でわかる英語のしくみ

1. 動詞と目的語

英語の動詞は、目的語が必要な動詞と、不要な動詞があります。

目的語が必要な動詞(他動詞)

動詞のすぐあとに、その行為を受ける(～される)人やものを表す名詞(目的語)が入ります。

Yuko takes a bus. (バスに乗る)

目的語が不要な動詞(自動詞)

動詞のあとに、人やものを表す名詞(目的語)は必要ありません。

Everyone smiles. (みんなが笑顔になる)

付録

横断的に文法を整理してあるので、英語の発想やことばをイメージで振り返り、理解することができます。



竹内 理 (関西大学)

文法学習と主体的学習

文法事項の確実な定着は、4 技能を統合したコミュニケーション活動を円滑に進める上できわめて重要です。また、小学校で体験的に学んだものを整理し、発展させていくためにも必要不可欠といえます。しかし、文法をルールとして教え、その知識を定着させるだけでは、これからの時代の英語教育としては不十分です。生徒たちを主体的(アクティブ)に学習に関わらせて、ルールをコミュニケーションの中で活用させ、使えるように定着をはかっていきたいものです。

「主体的(アクティブ)」とは、実際に使う、意見を出しあい考える、わかりやすくまとめる、別の場面に応用する、理解した内容を教えあうなど、学習者が活動の主体となり、受け身ではない学習を進めることを意味します。指導要領でいうところの、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と、思考・判断・発信の要素を具現化したもので、主体的に学ぶことで、学習の定着度は何倍も増すとされています。

では、文法を学ぶ場合、主体的(アクティブ)学習をどのように取り入れていけばよいでしょうか。NEW CROWNでは、各 Lesson の終わりに「文法のまとめ」を組み込んでいます。これを、ペア(グループ)ワークを利用して、GET や USE で使った文を参考にさせながら、生徒達に自らの力でルールを整理させていくというのはどうでしょうか。その後、「文法のまとめ」を参照しながら改めて確認させ、さらに理解したものを他者に対して説明(質問)しあうような活動を取り入れることで、定着度は格段に増すものと思われます。

また「Review」「絵でわかる英語のしくみ」を利用する際も、生徒にそれまでの学習を振り返らせ、自分版の「Review」「絵でわかる英語のしくみ」を作らせるという活動が考えられます。その際、前述の「文法のまとめ」と同様、ペア(グループ)ワークなどの協働が重要となります。また、教員の発問による誘導も必須でしょう。加えて、単なるまとめの作業に終始しないよう、文法事項を使ったコミュニケーション活動を取り入れていくことも大切です。

「(自分が)教わったようにしか教えられない」とよく言われますが、これでは新しい時代の英語教育を切り拓くことはできません。文法学習の中にも、生徒たちを主体的に関与させるような学びを取り入れ、新たな学びのスタイルをアクティブに作り出していきたいと思います。